生活工房

アニュアルレポート2023

MAP

BOOK

APRIL 2023

MARCH 2024

LIFESTYLE
DESIGN CENTER
ANNUAL REPORT

2023

生活工房

アニュアルレポート2023

生活工房とは

About Lifestyle Design Center

暮らし×デザインの交流拠点

物や情報が溢れる時代。生活工房は「モノ」だけでなく「コト」に光をあて、小さな物語に耳を傾けます。観たり、触ったり、感じたりする体験を通して、本当の豊かさや、大切にしたい文化をともに考える場をつくります。暮らしの根っこに触れること、なぜだろうと考えること、対話することを大切にしています。

The crossroad of life and design.

In an age overflowing with things and information. Lifestyle Design Center illuminates the intangible as well as the tangible, paying attention to small stories. Through the experience of seeing, touching, and sensing, we ask: what is true abundance, what is culture? We value the creation of a space for dialogue, to touch on the roots of life and ask each other why.

生活工房の事業

Our Program

「展覧会」「ワークショップ」「セミナー」「地域と市民活動」の4つの事業を主として生活工房は運営されています。

Lifestyle Design Center primarily supports the four programs of exhibitions, workshops, seminars, and local and regional activities.

展覧会 | Exhibition

新たな発見が暮らしを彩る

New Discoveries Embellish Daily Life

生活工房ギャラリーやワークショップルームでは、デザインやクラフト、異文化など多角的なテーマで展示を実施しています。

Exhibitions on diversified themes such as design, crafts, and foreign cultures are held in the Seikatsu-Kobo Gallery and the Workshop Rooms.

ワークショップ | Workshop

2

多彩なモノづくりを楽しむ

The Joy of Making Things

参加者が手や体を動かしながら「考え」「作る」ワークショップでは、子供から大人までが楽しめる多彩なプログラムを実施しています。

A variety of programs are held where participants of all ages can move their hands and bodies as they enjoy "think" and "make" workshops.

セミナー | Seminar

3

社会を知る、学びを楽しむ

Understanding Society, Enjoying Learning

専門家やクリエイターを招き、暮らしや文化に関する生きた言葉に触れるさまざまな講演やトークイベントを実施しています。

Experience living words on life and culture in various lectures and talk events given by specialists and creators.

地域と市民活動 | Local Community

4

地域とつながる

Connecting with the Region

地域の活動と交流を支援し、多様な価値観や共感の輪を広げ、ネットワークを構築し豊かな地域づくりのお手伝いをしています。

We assist with region-building by supporting area and regional activities and exchange, widening the circle of various values and sympathies, and creating vibrant networks.

生活工房の一年

春

1月31日（火）〜4月23日（日）

● Exhibition
続・セタガヤママ　小さなメディアの40年

5月16日（火）〜7月17日（月・祝）

● Exhibition
牧野伊三夫展　塩と杉

夏

7月25日（火）〜10月22日（日）

● Exhibition
20世紀の映像百科事典をひらく ― 映像のフィールドワーク展 Vol.2
ひもをうむ、あむ、くむ、むすぶ

8月12日（土）・13日（日）

● Workshop
世田谷アートフリマ presents　夏休みワークショップ

8月23日（水）・24日（木）・25日（金）

● Workshop
オンライン開催だヨ！ おうちに集合　第22回おはなしいっぱい

秋

9月2日（土）

● Local Community
井岡さん家のホームビデオ鑑賞会

10月31日（火）〜2024年1月21日（日）

● Exhibition
あみきをほどく　家庭用編み機の展覧会

11月3日（金・祝）

● Seminar
こども・おや・じぶん　親子関係を生きる君へ

11月4日（土）・5日（日）

● Local Community
ケアするホームムービー

12月2日（土）・3日（日）

● Seminar
どう？就活　自分と仕事の出会い方 vol.3

冬

2024年1月31日（水）〜4月21日（日）

● Exhibition
世田谷のまちと暮らしのチカラ　まちづくりの歩み50年

2024年2月13日（火）〜3月17日（日）

● Local Community
サイト・リノベーションの現場

2024年2月18日（日）・25日（日）

● Seminar
老人性アメイジング！　寿ぐ老いとベートーヴェン

通年

● Exhibition
生活工房アレコレ2023　8ミリフィルム常設上映

● Local Community
穴アーカイブ：an-archive　せたがやアカカブの会

● Local Community
穴アーカイブ：an-archive
エトセトラの時間　見えるものと見えないものを語る会

● Local Community
ちかくのとーく vol.4〜6

2023

2024

展覧会

Exhibition

Exhibition | 展覧会

牧野伊三夫展　塩と杉

ひもをうむ、あむ、くむ、むすぶ

20世紀の映像百科事典をひらく ― 映像のフィールドワーク展 vol.2

あみきをほどく

家庭用編み機の展覧会

世田谷のまちと暮らしのチカラ

まちづくりの歩み50年

8ミリフィルム常設上映

生活工房アレコレ2023

目次

生活工房とは？ 02
生活工房の事業 02
生活工房の1年 02

展覧会

牧野伊三夫展　塩と杉 06
20世紀の映像百科事典をひらく ― 映像のフィールドワーク展 vol.2
ひもをうむ、あむ、くむ、むすぶ 08
家庭用編み機の展覧会
あみきをほどく 10
まちづくりの歩み50年
世田谷のまちと暮らしのチカラ 12
生活工房アレコレ2023
8ミリフィルム常設上映 14

ワークショップ／セミナー

世田谷アートフリマ presents　夏休みワークショップ 16
オンライン開催だヨ！おうちに集合　第22回おはなしいっぱい 17
老人性アメイジング！　寿ぐ老いとベートーヴェン 18
どう？就活　自分と仕事の出会い方 vol.3 20
こども・おや・じぶん　親子関係を生きる君へ 22
ちかくのとーく 24
せたがやアカカブの会・エトセトラの時間 25
共催事業　井岡さん家のホームビデオ鑑賞会／ケアするホームムービー／サイト・リノベーションの現場 26
世田谷市民活動支援会議　市民活動支援コーナー 27 27
フライヤーギャラリー 28
施設ガイド 38
数字で見る生活工房 40

Workshop / Seminar

Local Community

牧野伊三夫展
塩と杉

（30代の声）
1人の地球に生きる
人間として生に向きあい、
作品を産みだすことに感動した

会場風景（撮影：尾嵜太）

私たちの生活に深く根をおろした塩と杉

２０２３年に『塩男』と題する絵本を上梓した、画家の牧野伊三夫氏の展覧会。

前半部では絵本の制作過程が垣間見える取材スケッチや草稿とともに、作品世界を再構成した全長10ｍに及ぶ巨大壁画を展示した。本展のために5日間かけて描いた大作には、製塩所の窯から出た灰が画材として使用されている。後半部では牧野氏が岐阜県高山市と大分県日田市で取り組む、林業にかかわる活動を紹介。日田のパートでは地域の林業を応援するために発足した「ヤブクグリ」の会による、現在進行形のユニークな活動を展示紹介した。

会期中には塩男のモデルとなった、福岡県糸島半島にある製塩所「工房とったん」の平川秀一氏を招いたトークイベントと、同氏がつくる「またいちの塩」の販売会を開催。また、普段は日田でしか購入できない、日本初の林業体験弁当「きこりめし弁当」の出張販売会も行った。４Ｆキッチンを調理場として活用し、コロナ禍を経て4年ぶりとなる「食」の関連企画となった。

丸太に見立てた牛蒡を日田杉のノコギリで切って食べる「きこりめし弁当」。

開催日時　5月16日（火）～7月17日（月・祝）
9:00～21:00
（祝日をのぞく月曜休み）
会場　生活工房ギャラリー
来場人数　10,665名
協力　あかね書房、新三郎商店、
飛驒産業、日田ヤブクグリ

「またいちの塩」販売ブース。左は塩男のモデルとなった平川氏

ギャラリー内で行ったトークイベントの様子

早朝から弁当を準備してくださった佐々木氏（中央）と黒木氏（左）。右は牧野氏

関連企画

「またいちの塩」出張販売&ギャラリートーク
開催日時　6月10日（土）
［販売］11:00～16:00、
［トーク］16:00～16:30
会場　生活工房ギャラリー
ゲスト　平川秀一（工房とったん）、
牧野伊三夫
参加人数　895名
参加費　無料

「きこりめし弁当」出張販売&ギャラリートーク
開催日時　6月17日（土）
［販売］11:00～16:00、
［トーク］16:00～16:30
会場　生活工房ギャラリー
ゲスト　佐々木美徳（寶屋店主）、
黒木陽介（ヤブクグリ事務局）、
牧野伊三夫
参加人数　984名
参加費　無料

20世紀の映像百科事典をひらく―映像のフィールドワーク展 vol.2

ひもをうむ、あむ、くむ、むすぶ

みる、やってみる、問いつづける。わたしの今ここから

2019年春に開催した「映像のフィールドワーク展」の第二弾。「エンサイクロペディア・シネマトグラフィカ（ECフィルム）」は第2次世界大戦後間もないドイツで生まれた〝映像による百科事典〟である。その中の「ひもづくり」に注目し、身近にある植物・動物繊維を素材に、衣服から住居まであらゆるものを生み出してきた人間のものづくりの原点を辿る展覧会を行った。

ECフィルムの中から、績む・編む・組む・結ぶ・撚る・綯う・織るなどの手仕事の映像を上映し、多摩川の草や世田谷産のヤシの葉、ほどいたセーターの毛糸や包装リボンなど、暮らしに身近なところから採集したさまざまな実物資料も展示した。

また、「映像を観て、自分でやってみる」6種のワークショップも行い、参加者は植物の感触や性質をたしかめながら、ひもを綯い・組み・編んでみて、自分の手に技術が備わっていくことの愉しみを体験した。

（60代の声）
人のいとなみの原点を
模索している点が素晴らしい！

身の回りにある草や葉っぱを使って変身してみよう！（撮影：松田洋一）

開催日時　7月25日（火）～10月22日（日）
9:00～21:00（祝日をのぞく月曜休み）
会場　生活工房ギャラリー
来場人数　25,655名
企画制作　EC活用プロジェクト
（下中菜穂、中植きさら［ポレポレ東中野］、丹羽朋子）
協力　公益財団法人下中記念財団、関野吉晴、墨田区
ワークショップ協力　株式会社紫水園、JA東京中央　砧地区青壮年部、景丘の家、くさっぱら公園、株式会社フジセン 伊藤英二、上東を愛する会（高知県いの町・吾北）、一般財団法人進化生物学研究所、おしゃれ工房 三軒茶屋とうきゅう店、世田谷区立次大夫堀公園民家園・岡本公園民家園、絹遊塾 工房 風花、佐藤小菜、松田牧恵、松田洋一、小松義夫、小松衛子
※一部、JSPS科研費23H03899 C03、20H01403助成

映像のスクリーンは時空を超えた窓

映像を観て、自らの手でやってみる（撮影：松田洋一）

世田谷産のココスヤシの葉をみんなで編む

関連企画

「映像をみる、やってみる」⓪あつめる
実施期間　4～9月
調査　ECフィルム活用プロジェクトメンバー採集班＋国際ファッション専門職大学授業「職人の世界」参加学生
参加人数　20名

「映像をみる、やってみる」①ばける
開催日時　8月4日（金）13:00～16:00
会場　ワークショップルームAB
講師　EC活用プロジェクトメンバー
対象　幼児以上
参加人数　10名
参加費　500円（保護者無料）

「映像をみる、やってみる」②なう よる
開催日時　8月5日（土）10:30～16:30
会場　ワークショップルームAB
講師　EC活用プロジェクトメンバー
対象　小学3年生以上
参加人数　16名
参加費　1,000円（保護者無料）

「映像をみる、やってみる」③たばねる
開催日時　8月26日（土）10:30～16:30
会場　ワークショップルームAB
ゲスト　ながはたじゅんぺい
（民俗行事の写真を撮っています）
対象　小学3年生以上
参加人数　17名
参加費　1,000円（保護者無料）

「映像をみる、やってみる」④あむ
開催日時　9月16日（土）10:30～16:30
会場　ワークショップルームAB
ゲスト　本間一恵
（かご編みの制作と研究をしています）
対象　小学3年生以上
参加人数　22名
参加費　1,000円（保護者無料）

「映像をみる、やってみる」⑤くむ むすぶ
開催日時　9月18日（月・祝）10:30～16:30
会場　ワークショップルームAB
ゲスト　西村優子（紙の造形作家）
対象　小学3年生以上
参加人数　24名
参加費　1,000円（保護者無料）

「映像をみる、やってみる」⑥あむ から おる へ
開催日時　10月1日（日）10:30～16:30
会場　ワークショップルームAB
講師　EC活用プロジェクトメンバー
対象　小学3年生以上
参加人数　19名
参加費　1,000円（保護者無料）

トークイベント「みる、やってみる、問い続ける―日本の今ここの場所から」
開催日時　10月7日（土）14:00～16:00
会場　セミナールームAB
ゲスト　吉田勝信（吉勝制作所）、
後藤一磨（「海の見える命の森」プロジェクト）
参加人数　19名
参加費　500円

『プーンミの島』上映会&監督トーク―沖縄県宮古諸島の苧麻文化を映像で記録すること
開催日時　10月15日（日）14:00～17:00
会場　セミナールームAB
ゲスト　春日聡（映像人類学者・国立歴史民俗博物館客員准教授）
参加人数　51名
参加費　500円

あみきをほどく

家庭用編み機の展覧会

（20代の声）
歴史といろんな編み機が見れてよかったです！

会場前半は編み機の変遷を展示（撮影：新井智子）

生誕100年！編み機の変遷と現在地

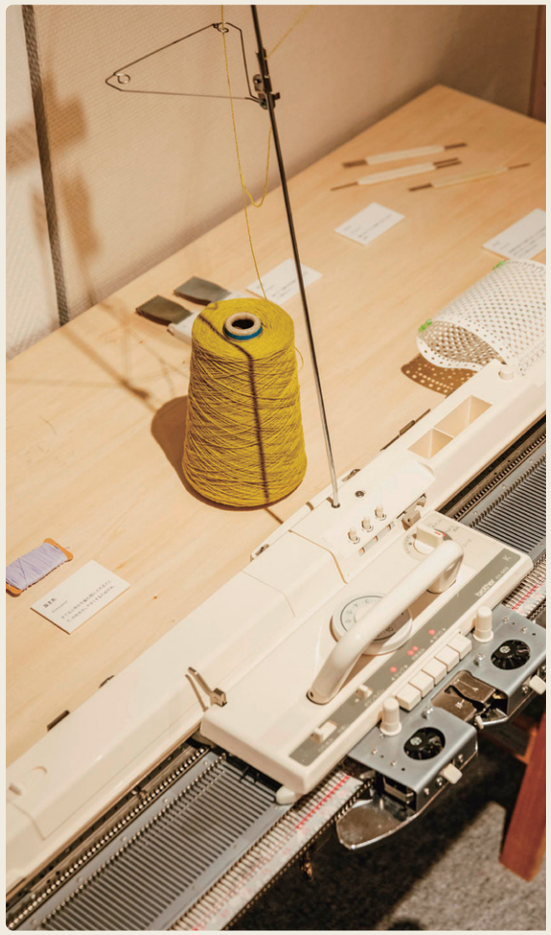
女性として初めて藍綬褒章を受章した発明家・萩原まさが「萩原式高速度手編器」を考案して100年の月日が流れた。戦後にはミシンと並ぶ家庭用品として愛用された家庭用編み機。その変遷を辿るとともに、今よりもっと暮らしの一部になっていた「編む」という営みを再考する機会として開催した。

大きな棚で区切られた会場は、戦前に普及した「萩原式」「S式」にはじまり、ブラザー工業が戦後に発売した15点ほどの編み機が並ぶ。あわせて、当時の教則本や雑誌のほか、パンチカードやタッピなど付属する道具も紹介。女性たちが担う家事労働のひとつだった編み物が趣味化していく過程も解説した。会場後半には、現在も編み機で制作・発表しているアーティストらの作品も展示した。

こうした作品や資料だけでなく、一般の方から募集した編み機にまつわるエピソードも紹介。猫が毛玉で遊ぶという定型表現にもみられるように、暮らしのなかに編み物があることは、現在よりもずっと当たり前のことだったようだ。

pipi-goldfish「ニットグローブ」（撮影：新井智子）

開催日時　10月31日（火）～
2024年1月21日（日）
9:00～21:00
（祝日をのぞく月曜および
11月5日、年末年始休み）
会場　生活工房ギャラリー
来場人数　15,342名
出品作家　編み物☆堀ノ内、近あづき、
丹治基浩、宮田明日鹿、
LOVE it ONCE MORE
協力　Knittingbird、
一般社団法人彩レース資料室



家庭用編み機（撮影：新井智子）

会場ツアーで実演中の様子

関連企画

ウィークエンド・ニッティング
開催日時　11月17日（金）～19日（日）、
2024年1月19日（金）～21日（日）
10:00～18:00
会場　ワークショップルームAB
参加人数　3,007名
参加費　無料

会場ツアー
「展示をまわる、編み機をさわる」
開催日時　11月17日（金）～19日（日）、
2024年1月19日（金）～21日（日）
①11:00～ ②14:00～ ③16:00～
各回40分程度
※11月19日（日）は①のみ開催
会場　生活工房ギャラリー、
ワークショップルームAB
参加人数　118名
参加費　無料

ニットスペース
「ほったらかし手編み倶楽部」
開催日時　11月17日（金）～19日（日）、
2024年1月19日（金）～21日（日）
10:00～17:00 ※入退場自由
会場　ワークショップルームA
参加人数　66名
参加費　無料

トーク
「あみきをほどく　編み機の来し方行く末」
開催日時　11月19日（日）15:00～17:00
会場　ワークショップルームB
聞き手　横山起也（編みキノコ作家／
NPO法人LIFE KNIT）
ゲスト　北川ケイ（彩レース資料室／
近代日本西洋技芸史研究家）、
田沼英治（Knittingbird）
参加人数　52名
（オンライン視聴3,819名
※1月25日時点）
参加費　500円

会場後半には作家5名の作品が並ぶ（撮影：新井智子）

Exhibition　展覧会

世田谷のまちと暮らしのチカラ

まちづくりの歩み50年

（20代の声）
世田谷の雰囲気の秘密を少し
知ることができて楽しかったです!

会場風景

世田谷のまちづくりはどのように発達し、何を残してきたのか

世田谷区で独自に発達した住民参加のまちづくり。区長公選制が復活した1974年を起点にして、その50年の歴史を振り返る展覧会。

企画制作はまちづくりの専門家や研究者によって組織された実行委員会が担い、世田谷トラストまちづくりと生活工房が共同で事務局を務めた。

会期中の毎週末、実行委員会のメンバーが交代でギャラリートークを行ったほか、各メンバーが独自に企画した多彩なイベントも催された。また、下北沢の書店B&Bや新宿紀伊國屋書店、階下のTSUTAYA三軒茶屋店では特設コーナーが設置され、展覧会のPRを行った。まちづくりを語るうえで欠かすことのできない私鉄各社や世田谷サービス公社から協賛を得るなど、実行委員会形式での開催は、単館では成しえない大きな広がりを生んだ。

よりよい生活環境のために住民が主体的にまちづくりに参加することは市民活動そのものであり、その意味において生活工房の立脚点に直結した、意義深い展覧会となった。

開催日時　2024年1月31日（水）～4月21日（日）
9:00～21:00
（祝休日をのぞく月曜休み）
会場　生活工房ギャラリー、
ワークショップルームB
来場人数　11,480名
※3月31日時点
共催　世田谷まちづくり展実行委員会、一般財団法人世田谷トラストまちづくり
協賛　小田急電鉄株式会社、京王電鉄株式会社、株式会社世田谷サービス公社、東急株式会社
助成　公益財団法人東京都都市づくり公社

4Fワークショップルーム
展示風景

3Fギャラリー展示風景

内覧会でのギャラリートークの様子

上｜4年ぶりに3・4Fの2フロアを使用した大型展となった
左｜3～4Fをつなぐ階段の吹き抜けにも展示をした

会場撮影：澤木亮平

関連企画

「私の好きな世田谷のまち」キャッチコピーコンクール
対象　小・中学生
応募期間　10月10日（火）～11月10日（金）
応募総数　71件

ギャラリートーク
開催日時　2024年2月3日（土）・12日（月・祝）・17日（土）・25日（日）・3月3日（日）・9日（土）・16日（土）・23日（土）・30日（土）・4月7日（日）・13日（土）・21日（日）
各日13:00～
参加人数　71名　※3月31日時点
参加費　無料

ちかくのとーくvol.06
「世田谷の、住民参加とまちづくり」※概要はP.24参照

未来の世田谷シンポジウム
開催日時　2024年3月17日（日）13:00～18:00
会場　セミナールームAB
進行　饗庭伸（東京都立大学教授）、
橘たか（まちづくりプランナー）
登壇者　株式会社イマックス、東急電鉄株式会社／株式会社ヒトカラメディア、株式会社はこぶん、京王電鉄株式会社／さくら花見堂の会、まもりやまテラスの会、株式会社世田谷サービス公社／一般社団法人シモキタ園藝部、小田急電鉄株式会社
参加人数　会場52名／オンライン213名
参加費　無料

※上記のほか、実行委員会のメンバーが独自に企画したさまざまなイベントが会期中に実施されました。

ワークショップ／セミナー

Workshop / Seminar

Workshop / Seminar ワークショップ／セミナー

世田谷アートフリマpresents

夏休みワークショップ

オンライン開催だヨ！おうちに集合

第22回おはなしいっぱい

老人性アメイジング！

寿ぐ老いとベートーヴェン

どう？就活

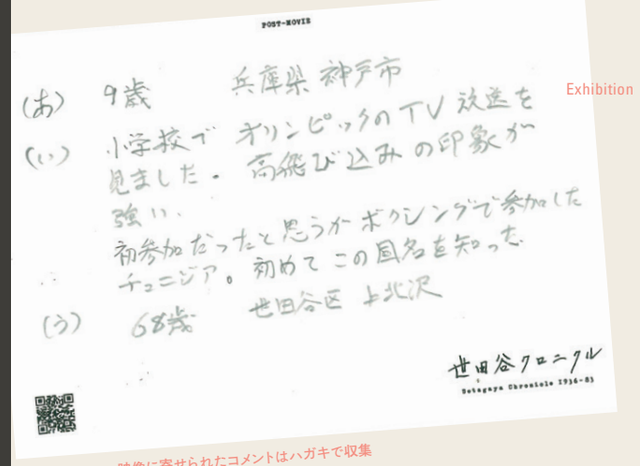
自分と仕事の出会い方 vol.3

こども・おや・じぶん

親子関係を生きる君へ

Exhibition 展覧会

生活工房アレコレ2023 8ミリフィルム常設上映



映像に寄せられたコメントはハガキで収集

8月に上映した『No.5』は、
1979～80年8月に撮影された8ミリフィルム

『駒澤オリンピック公園にて』（1964年10月12日）

ハガキに記されたコメントと年間プログラムを兼ねたチラシ（デザイン：Tanuki）

開催日時　4月8日（土）～2024年4月7日（日）
9:00～21:00
（祝日をのぞく月曜および
年末年始休み）
会場　生活工房ギャラリー（階段下）
来場人数　39,044名　※3月31日時点
企画制作　remo［NPO法人記録と表現とメディアのための組織］

階段下で展開する小コーナー

昭和の8ミリフィルムに映る、暮らしのあれこれ

「生活工房アレコレ」は、2021年4月から展開している小さな展示コーナーだ。生活工房のバックヤードに眠る事々物々や、開催中の展覧会やイベントに関する資料を常設。通年で紹介している。

昨年度から引き続き、ウェブサイト「世田谷クロニクル」（25頁参照）で公開中の8ミリフィルム映像を常設で上映。ラインナップは、1955（昭和30）～1979（昭和54）年にかけて撮影された12巻。各映像の撮影月にあわせて、毎月8日に映像を入れ替えながら通年で展示した。経堂小学校や羽根木公園など身近な場所から、富士山や日光東照宮など行楽地まで、さまざまな場所で撮影されている。

会場では、来場者が映像をきっかけに思い出したエピソードを募った。「私にとって神宮外苑は、自転車練習の場所」「うちのおじいちゃんも冬になると葉ボタン育ててた」「私も小さい頃は、丈の短い吊りスカートにおかっぱでした」など、多くの声が寄せられた。集まったエピソードは、SNS等でも紹介している。

Workshop / Seminar　ワークショップ／セミナー

夏休みワークショップ

世田谷アートフリマ presents

（小学3年生の声）
カラフルな沢山の素材が
とてもワクワクして、
色々試したくなる場だった。

親子それぞれで恐竜のぬいぐるみをつくる様子

Tシャツにシルクスクリーン印刷をする様子

プリントしたオリジナルキャラクターと同じ装飾で撮影

2時間かけてつくったぬいぐるみと記念撮影

自分だけのぬいぐるみをつくろう!
開催日時　8月12日（土）
①11:00～13:00
②15:00～17:00（各回完結）
会場　ワークショップルームB
講師　100 mermaids workshop（クリエーター）
参加人数　17名

自分のイラストでTシャツをつくろう!
開催日時　8月13日（日）
①10:00～11:30　②13:30～15:00
③16:00～17:30（各回完結）
会場　ワークショップルームA
講師　Nuusle（ものづくりユニット）
参加人数　18名

対象　小学3～6年生
参加費　各回1,000円
共催　世田谷アートフリマプロジェクト

その先に紡がれるストーリー

世田谷ゆかりの作家たちによる、小学生を対象にしたワークショップを開催した。

「自分だけのぬいぐるみをつくろう!」の前半では、ぬいぐるみの歴史にふれて、制作レクチャーを行った。後半は、ボタン・ビーズ・毛糸・レースなど色々な材料を使って、無地のボディに顔を描き、飾りつけなどをしてぬいぐるみを制作。名前・年齢・好きなことなど、キャラクター設定を考えて発表した。親子で制作した参加者も多く、家でぬいぐるみと一緒に過ごすことを楽しみにしていた。

「自分のイラストでTシャツをつくろう!」前半では、シルクスクリーン印刷の仕組みを説明して、制作レクチャーを行った。後半は、自分で描いた絵と背景柄を組み合わせて2色刷りのTシャツを制作。新学期に学校へ着ていくと話す参加者や、姉妹の名前が入ったスズランの絵を描いて、妹にプレゼントした参加者もいた。

ワークショップ終了後も各々の参加者のもとで、その先の物語が紡がれていくことだろう。

Workshop / Seminar　ワークショップ／セミナー

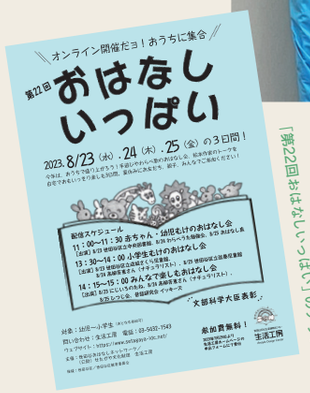
第22回 おはなしいっぱい

オンライン開催だヨ！おうちに集合

（50代の声）
子どもたちの手づくり絵本、
子どもらしく、
おもしろかったです。

出演グループが
動画撮影や編集も行った

ライブ配信の様子



「第22回おはなしいっぱい」のチラシ

開催日時　8月23日（水）～25日（金）
11:00～15:00
会場　オンライン（Zoomウェビナー）
出演　世田谷区立中央図書館、わらべうた勉強会、おはなし泉、成城さくら児童館、高柳芳恵（ナチュラリスト・絵本作家）、弦巻児童館、にじいろのたね、ひつじ会、昔話研究会 イッキーズ
対象　幼児～小学生（大人も参加可）
参加人数　延871名
参加費　無料
共催　世田谷おはなしネットワーク

夏休みにおうちで楽しむオンラインおはなし会！

「世田谷おはなしネットワーク」※と共催する本企画は、夏休み期間中の3日間におはなし会「おはなしいっぱい」を開催している。構成、演出、出演、準備のすべてを出演者が行う市民の手づくり企画として回を重ね、今年で22回目を迎えた。

今年度は昨年度に引き続き、場所を問わずだれでも参加できるオンライン形式での開催となった。中央図書館や児童館など、世田谷区立施設スタッフと利用者も多数出演。手遊び、わらべ唄、パネルシアター、人形劇、素はなしなどの多彩なプログラムを実施した。参加者には、リピーターも多く、夏の恒例イベントとして多くの区民に親しまれている。

毎年、世田谷おはなしネットワークが中心となり、区内外で活動する読み聞かせの会と連携することで、参加グループ同士の交流や参加者のコミュニケーションの場づくりを目指している。

※1997年活動開始。世田谷区内で活動する複数のおはなしの会が連携し、図書館などで活動中。現在、60のグループ・個人会員から成る。

Workshop / Seminar　ワークショップ／セミナー

老人性アメイジング！

寿ぐ老いとベートーヴェン

（40代の声）
こんなことはこれから
出会えるかどうか。本当に素晴らしい。
感激しました。

2日目：村瀬孝生氏の小噺に微笑むクァルテット・エクセルシオ
左から：西野ゆか（Vn.1）、北見春菜（Vn.2）、大友肇（Vc）、吉田有紀子（Va）

老いるってこんなに面白い

ネガティブに捉えられがちな「老い」のイメージを多様なコンテンツから積極的に捉え直すアメイジングなイベント。

1日目：寿ぐ老い

先進的なケアで大きな注目を集める「宅老所よりあい」の施設長：村瀬孝生氏のユーモラスな老い小噺「生きること―死ぬこと」や、美学者の伊藤亜紗氏の講演「老いと芸術　谷崎潤一郎　ジジイ・テリブル！」を聞き、参加者同士が「老い」を巡って語り合った。

2日目：老人性アメイジングとベートーヴェン

天才作曲家ベートーヴェンが、完成された傑作を経て晩年に迎えた創作の境地とはどんなものだったのか。国内外の第一線で活躍するクァルテット・エクセルシオによるベートーヴェン晩年の弦楽四重奏曲の生演奏と村瀬孝生氏の小噺を交えながら作品の魅力を紐解き、「老い」がもたらす豊かな人間像を探った。

誰もが「老い」について不安を抱える超高齢化社会。既存の人間観への拘りを解きほぐし、より包括的で自由な人間像を模索する2日間となった。

寿ぐ老い

開催日時　2024年2月18日（日）11:30～18:30
会場　東京大学 駒場Ⅰキャンパス 21 KOMCEE West B1F レクチャーホール
講師　伊藤亜紗（美学者）、村瀬孝生（「宅老所よりあい」ほか統括所長）
参加人数　155名

老人性アメイジングとベートーヴェン

開催日時　2024年2月25日（日）13:00～17:30
会場　世田谷美術館 講堂
講師　村瀬孝生
演奏　クァルテット・エクセルシオ
参加人数　132名

対象　10代以上
進行・解説　山内泰（NPO法人ドネルモ代表理事／一般社団法人大牟田未来共創センター理事）
参加費　各日3,000円（自由席）
協力　東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属 共生のための国際哲学研究センター（UTCP）、公益財団法人せたがや文化財団 音楽事業部、世田谷美術館

1日目：村瀬孝生氏（左）、伊藤亜紗氏（中）、山内泰氏（右）の鼎談

本企画の記録映像は
ウェブサイトで公開予定

2日目：クァルテット・エクセルシオによるベートーヴェン晩年作品のコンサート

1日目：
村瀬孝生氏の小噺に聞き入る参加者の皆さん

どう？就活

自分と仕事の出会い方 vol.3

（10代の声）
自分の将来についての考え方に
新しい視点を与えてくれた。
不安から希望に変わった。

初日の会場の様子

納得は遅れてやってくる

働き方研究家の西村佳哲氏やゲストの話を聞き、働くことについて考えるトークイベントのシリーズ最終回。

ゲストで特に印象的だったのは「できるかも？　という勘違いが人生を誘うこともある。偶然出会った人や事、あらゆる物が絡み合い人生は進んでいく。自分がコントロールできることは少ない」と語った川内有緒氏だ。人は「目標を立て努力して夢を実現する」というセオリーを妄信しがちだ。スキル不足を理由に挑戦を踏み止まる人は多い。一方、ゲストらに共通するのは「まずは飛び込む、その時々の状況に応答する形で一生懸命に問い・考え・もがくうちに、いつの間にか前進している」という流れに身を置くことだ。「チャンスは常に準備万端でない時に訪れるし、納得は遅れてやってくる」という逆の発想は、参加者に新鮮な驚きを与えた。

本シリーズ全12名のゲストの仕事の仕方と生き方が、色々な悩みを抱えて参加してくれた人々の一助となることを願っている。

働くってなに？
開催日時　12月2日（土）13:00〜18:30
ゲスト　川内有緒（ノンフィクション作家）、鳥羽和久（教育者／作家）
参加人数　112名

会社ってなに？
開催日時　12月3日（日）13:00〜18:30
ゲスト　北川史織（『暮しの手帖』編集長）、小川立夫（パナソニックホールディングス執行役員）
参加人数　78名

会場　ワークショップルームAB
対象　10代以上
参加費　各日2,000円（一般）、500円（10代）
ファシリテーター／企画制作
西村佳哲（働き方研究家／リビングワールド）
出店　BOOK SHOP twililight

参加者同士の対話の様子

本企画の記録映像は
ウェブサイトで公開中

西村佳哲氏（左）、鳥羽和久氏（右）

北川史織氏（左）、小川立夫氏（中）、川内有緒氏（右）

三軒茶屋のBOOK SHOP
twililight出張販売の様子

地域と市民活動

Local Community

Local Community | 地域と市民活動

ちかくのとーく

穴アーカイブ：an-archive

- せたがやアカカブの会
- エトセトラの時間
  見えるものと見えないものを語る会

共催事業

- 井岡さん家のホームビデオ鑑賞会
- ケアするホームムービー
- サイト・リノベーションの現場

世田谷市民活動支援会議

市民活動支援コーナー

Workshop / Seminar | ワークショップ／セミナー

こども・おや・じぶん

親子関係を生きる君へ

（40代の声）
立場を3つ入れ替えた内容が面白かった。

ゲストの鳥羽和久氏

聞き手の山田理絵氏

聞き手の中里晋三氏

グループ対話をする様子

「こども・おや」をテーマにトークをする様子

自分独特の生き方

親子関係や子育てについて鋭い視点で切り込む著作が注目されている教育者・作家の鳥羽和久さんを迎え、「こども」「おや」「じぶん」という3つの視点から自らを見つめ直すことをテーマに二人の聞き手が話を伺い、最後にグループ対話を行った。

「こども・おや」では、近い関係だからこそ各々が相手を無意識的に内面化してしまうことで起こる双方の苦しさについて取り上げ、各々がどのように自分の声を取り戻し、言葉を獲得していくのかについて語り合った。

また、自分が好きだと思うヒト・モノ・コトについて人前で堂々と表現できるようになるまでの過程に「じぶん」が浮かび上がってくるヒントを得た。

多様な価値観に触れて言葉を獲得することで、親・友達・社会と距離をとることができる。親の親、親になった自分、かつて子どもだった自分、それらを俯瞰しながら交替する想像力を持てるようになるときにやっと、自分独特の生き方が立ち上がるのかもしれない。

開催日時　11月3日（金・祝）13:00〜18:30
会場　ワークショップルームAB
ゲスト　鳥羽和久（教育者／作家）
聞き手　中里晋三（UTCP特任研究員）、山田理絵（UTCP特任助教）
対象　10代以上
参加人数　21名（対談+ミニ対話）、32名（対談+ミニ対話+グループ対話）
参加費　2,000円（対談+ミニ対話）、3,000円（対談+ミニ対話+グループ対話）
協力　東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属 共生のための国際哲学研究センター（UTCP）

本企画の記録映像はウェブサイトで公開中

（40代の声）
大事なことはすぐ目の前に、
足元にあると感じることができました。

ちかくのとーく

ちかくの活動を
ちかくの人に紹介する
トークシリーズ

世田谷区内のまちづくりや市民活動、地域に関わる文化活動について、ゲストを招いてじっくりお話を伺うトークプログラム。２０２１年度にキックオフを行って3年目を迎えた。

今年度は3本のプログラムを開催。「羽根木で続く、冒険遊び場のこと」では、１９７９年に開設した羽根木プレーパークの歩みと現在の状況について伺った。遊び場の運営から見えてくる社会の変化が印象的だ。「千歳烏山の、まちづくりに集うひと」では、バリアフリーへの取り組みや、多世代交流の場となっているコミュニティカフェの運営を紹介。千歳烏山という地域の特色を考える機会となった。最後は、展覧会「世田谷のまちと暮らしのチカラ」と連携した特別回。世田谷区のまちづくりの歩みを振り返った。

およそ4か月に1度開催される本企画。いずれも対面とオンラインで開催しているが、区外からの参加者も少なくない。身近で実践している人々の声を通して、地域社会のこれからを考えていきたい。

千歳烏山で展開するそれぞれの活動を紹介

会場でのグラフィックレコーディング

vol.6では展覧会（p.12）の実行委員会のメンバーでもある2名が登壇

最後はゲストから締めのひとことを毛筆で

羽根木プレーパークの開設から現在まで語る

vol.04 羽根木で続く、冒険遊び場のこと
開催日時　8月27日（日）14:00〜16:00
ゲスト　天野秀昭（NPO法人プレーパークせたがや理事）、荒木直子（羽根木プレーパーク世話人代表）
参加人数　14名（会場参加）、19名（オンライン参加）

vol.05 千歳烏山の、まちづくりに集うひと
開催日時　12月3日（日）14:00〜16:00
ゲスト　福永順彦（場所づくり研究所プレイス／なりたて農民）、川崎修（NPO法人CFFジャパン／一般社団法人ななつのこ理事・事務局長）
参加人数　11名（会場参加）、9名（オンライン参加）

vol.06 世田谷の、住民参加とまちづくり
開催日時　2024年2月3日（土）14:00〜16:00
ゲスト　饗庭伸（東京都立大学教授）、齋藤啓子（武蔵野美術大学教授）
参加人数　40名（会場参加）、31名（オンライン参加）

会場　セミナールームAB
進行　市川徹（まちづくりコーディネーター）
記録　千葉晋也（まちづくりデザイナー）
参加費　各回200円（オンラインは無料）
企画制作　株式会社世田谷社

せたがやアカカブの会
エトセトラの時間
見えるものと
見えないものを語る会

（50代の声　「エトセトラの時間」参加者）
色んな人の意見が聞けたことがよかった。

「エトセトラの時間」でのひとコマ

「エトセトラの時間」での会話記録はYouTubeで公開

映像鑑賞によって思い出したことは
ハガキに記入。内容はSNS等でも紹介した

「せたがやアカカブの会」でのひとコマ

「せたがやアカカブの会」番外編として、
参加者が映像目録の丁合をお手伝い

記録に残るもの、
残らないもの、等々

世田谷区民から提供いただいた84巻の8ミリフィルムを公開しているウェブサイト「世田谷クロニクル」。映像の利活用の一環として、２つのプログラムを実施した。

「せたがやアカカブの会」は、少人数で映像を囲み、参加者自身の経験や気付いたことを語るワークショップ。映画館や自宅での映像鑑賞とは異なり、自分の視点で話すこと、相手の声に耳を傾けることが尊重され、同じシーンを繰り返し見る経験は、ほかにはない鑑賞体験となった。

「エトセトラの時間」は、目の見えない人がナビゲーターとなって映像を鑑賞するオンライン・ワークショップだ。アカカブの会と同じく、話すこと、聴くことが醍醐味だが、より映像に映っているもの、あるいは写り込んでしまったものを言葉にした。また、ワークショップの音声 記録「会話録」をYouTube で公開している。

さらに、東京都美術館への貸出やいき食堂での上映、映画作品への提供など、映像の利活用が生活工房の外にも広がっている。

せたがやアカカブの会
開催日時　vol.35：9月9日（土）、vol.36：12月10日（日）、vol.37：2024年3月3日（日）14:00〜15:30
会場　ワークショップルームA（vol.37のみセミナールームAB）
参加人数　45名
参加費　無料
企画制作　remo［NPO法人記録と表現とメディアのための組織］
※出張編として11月4日（土）に下北沢BONUS TRACKで開催（p.26参照）

エトセトラの時間　見えるものと見えないものを語る会
開催日時　①9月23日（土・祝）、②2024年1月13日（土）14:00〜17:00（各日完結）
会場　オンライン（Zoomミーティング）※手話通訳あり
参加人数　9名
参加費　無料
企画制作　remo［NPO法人記録と表現とメディアのための組織］、視覚障害者とつくる美術鑑賞ワークショップ

共催事業

井岡さん家のホームビデオ鑑賞会

ケアするホームムービー

サイト・リノベーションの現場

（40代の声
「ケアするホームムービー」参加者）
有意義な時間でした。
他の地域でも同じような
活動ができるとさらに良いですね。

「井岡さん家のホームビデオ鑑賞会」でのひとコマ（写真提供：めとてラボ）

映像を解説する井岡家の人々
（写真提供：めとてラボ）

「せたがやアカカブの会　下北沢出張編」
（写真提供：AHA!）

トークイベント
「ケアするホームムービー」

「サイト・リノベーションの現場」

生活工房を使う、開く、飛び出す

地域の大学やNPO団体と連携して事業を実施する「共催事業」。今年度は鑑賞会と展覧会、さらに生活工房を飛び出してイベントを行った。

視覚言語（日本の手話）で話すろう者・難聴者・CODA（ろう者の親をもつ聴者）らが活動する「めとてラボ」と「井岡さん家のホームビデオ鑑賞会」を開催。個人宅で撮影されたビデオを一緒に鑑賞しながら、それぞれの家庭にあるホームサインなどを共有する機会となった。

同じく映像プログラムとして、BONUS TRACK（世田谷区代田）で開催された「ケアリングノーベンバー」に、「世田谷クロニクル」の利活用企画で参加。せたがやアカカブの会（25頁参照）の出張編と、「ポスト・ムービー・トレイル」（2022年度開催）を振り返るトークイベントを行った。

さらに、キャンパスを三軒茶屋に構える昭和女子大学の環境デザイン学科で、長らく教鞭をとってきた杉浦久子教授のこれまでの活動を紹介する展覧会を開催。研究室が行ってきたさまざまなプロジェクトを展示公開した。

めとてラボ×生活工房
井岡さん家のホームビデオ鑑賞会
開催日時　9月2日（土）10:00〜12:00
会場　ワークショップルームB
参加人数　29名
参加費　無料
共催　東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、一般社団法人ooo

BONUS TRACK×生活工房
ケアするホームムービー（「ケアリングノーベンバー2023」参加企画）
①せたがやアカカブの会 下北沢出張編　②ケアするホームムービー
開催日時　①11月4日（土）14:00〜15:30、②11月5日（日）14:00〜15:30
会場　①世田谷代田 仁慈保幼園ピアッツア　②BONUS TRACKギャラリー
出演者　①松本篤（NPO法人remo）②神野真実（デザインリサーチャー）、尾山直子（看護師／写真家）、木野雄太（NPO法人remo）
参加人数　①14名、②16名
参加費　無料
企画制作　remo[NPO法人記録と表現とメディアのための組織]
協力　BONUS TRACK、桜新町アーバンクリニック、世田谷代田 仁慈保幼園、日記屋月日

昭和女子大学×生活工房
サイト・リノベーションの現場
公開　杉浦久子研究室
開催日時　2024年2月13日（火）〜3月17日（日）
会場　ワークショップルームA
来場人数　4430名
共催　昭和女子大学　環境デザイン学科

世田谷市民活動支援会議

世田谷市民活動支援会議（通称：Netty）は、「より良い地域社会をつくるための市民活動」を支えるネットワーク。行政である世田谷区と、施設運営や助成金の提供、活動相談など多様なかたちで市民活動を支援する6つの中間支援組織で構成されている。

今年度は、リモートによる連絡会議を2回開催し、世田谷区役所の新庁舎に「区民自治と協働・交流の拠点としての庁舎」の実現をめざして計画されている区民利用・交流拠点施設について、意見交換を行った。

また、毎年作成している市民活動に役立つ情報をまとめた冊子『せたがや市民活動知っ得情報2024』を発行した。

『せたがや市民活動知っ得情報2024』

ほかの構成団体　社会福祉法人世田谷区社会福祉協議会、社会福祉法人世田谷ボランティア協会、一般財団法人世田谷トラストまちづくり、NPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）、社会福祉法人共生会SHOWA、世田谷区生活文化政策部市民活動推進課

市民活動支援コーナー

市民活動体験喫茶パオの様子

市民団体の活動をサポート

世田谷区内で活動するさまざまな団体を支援する場。日常的な会合や講座に利用できる貸出スペースがあるほか、印刷機や大判プリンター、紙折り機を利用して、活動のためのチラシやポスター、冊子を作成することもできる。また、情報掲示板やチラシラックでは、登録団体のイベント情報の告知やメンバー募集なども可能。

市民活動団体のニーズを的確に汲み取り、柔軟に対応するため、運営を中間支援組織であるNPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）に委託している。10月には、4年ぶりの通常開催となった「世田谷アートタウン三茶de大道芸」に合わせて「市民活動体験喫茶パオ」を開催。登録団体のさまざまな活動を体験コーナーや喫茶スペースでの交流を通じて紹介した。

場所　生活工房3F
開館時間　9:00〜21:00（月曜休館）
委託先　NPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA）
来場人数　8,478名（2023年4月1日-2024年3月31日）

三軒茶屋・三角地帯

街の中の生活工房フライヤー

牧野 伊三夫展 「塩と杉

MAMESHO

落花生
あみきを
ほどく

AQUA 洗濯機 7kg
CO/N WASHER
洗濯機シャワーボタン
生活工房
生活工房ギャラリー

コインランドリー

ちかくのとーく
冒険遊び場のこと
まちづくりに集うひと
住民参加とまちづくり
AQUA 洗濯機 4.5kg
¥200
CO/N WASHER

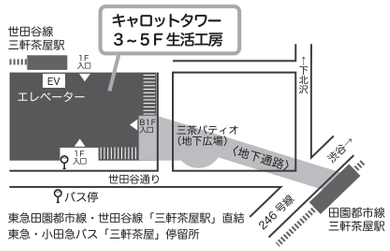
SANBY
サンビー行書

ゆうらく通り掲示板
おはなし いっぱい
ひもをうむ、あむ、くむ、むすぶ
老人性アメイジング!
どう? 就活
ゆうらく通りを、ご利用の
お客様は指定の場所に整列して
駐輪して下さい。
ここは三軒茶屋２丁目１３番です 無断掲示禁止

禁煙
NO SMOKING
どう? 就活
CASTANET

生活工房は、地域の人々の活動や発表の場!

生活工房では多彩な設備を備えたスペースで独自の企画を行うほか、市民団体などにお部屋を貸し出しています。スペースごとに登録条件・利用方法などが異なりますので、詳細はお問い合わせください。



世田谷文化生活情報センター
生活工房
Lifestyle Design Center

休館日・管理休館日：年末年始・月曜日（祝日の場合は除く）
所在地：東京都世田谷区太子堂4-1-1　キャロットタワー
TEL：03-5432-1543
URL：https://www.setagaya-ldc.net

5F

講演会やミーティングに最適

「セミナールーム」は、講習会や会議に適したスペースです。プロジェクターを含む映像・音響設備も備え、効果的なプレゼンテーションが可能です。A・B各部屋の可動式間仕切りを外せば最大で120名（机椅子使用時は108名）まで収容できます。

セミナールームA

貸出対象スペース

74㎡／定員48名／利用時間9:00～22:00

セミナールームB

貸出対象スペース

83㎡／定員48名／利用時間9:00～22:00

4F

ものづくりや展示を楽しむ

「ワークショップルームA」は、ものづくりやトークイベントに対応したスペースで、併設されたキッチン（63㎡）には、各種厨房用品も備えています。多人数の交流会にも最適です。
「ワークショップルームB」は、扇形の壁面が特徴的な展示スペースです。可動パネルで室内のレイアウト変更ができ、多様な展示が行えます。音響や映像機器を使った集会等の開催も可能です。

ワークショップルームA

貸出対象スペース

126㎡／定員50名／利用時間9:00～22:00

ワークショップルームB

貸出対象スペース

145㎡／定員50名／利用時間9:00～22:00

3F

生活工房の展示や市民活動の拠点

「生活工房ギャラリー」は、暮らしのデザインやクラフト、異文化紹介などをテーマに、生活工房が主催する企画展示を行っています（一般への貸出はしていません）。
「市民活動支援コーナー」は、世田谷で活動している市民活動団体が打ち合わせや作業を行うことができるスペースです。パソコンや印刷機などの利用も可能です（有料）。

生活工房ギャラリー

開館時間：9:00～21:00

市民活動支援コーナー

利用時間：9:00～21:00　TEL：03-5432-1511

トップページ
施設案内
クラシーとカワルンの「生活工房っていったいどんなところなの?」

次年度のお知らせ

2024年度展覧会のご案内

4月29日（月・祝）～8月25日（日）
アウト・オブ・民藝｜「民」から芋づる編　MINGEIのB面!

9月3日（火）～12月26日（木）
途中でやめる展（仮）

2025年1月下旬～4月下旬
描かれた動物の人類学展（仮）

ご支援・ご協力いただいた企業、団体、教育・公共機関等（各50音順・敬称略）

共催：（一社）ooo、昭和女子大学環境デザイン学科、世田谷アートフリマプロジェクト、世田谷おはなしネットワーク、（一財）世田谷トラストまちづくり、世田谷まちづくり展実行委員会、東京都、（公財）東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京

協力：あかね書房、（一社）彩レース資料室、おしゃれ工房三軒茶屋とうきゅう店、景丘の家、くさっぱら公園、絹遊塾 工房 風花、桜新町アーバンクリニック、（株）紫水園、JA東京中央砧地区青壮年部、（公財）下中記念財団、上東を愛する会（高知県いの町・吾北）、（一財）進化生物学研究所、新三郎商店、墨田区、世田谷区立次大夫堀公園民家園・岡本公園民家園、世田谷代田仁慈保幼園、（公財）せたがや文化財団音楽事業部、世田谷美術館、東京大学大学院総合文化研究科・教養学部附属共生のための国際哲学研究センター（UTCP）、Knittingbird、日記屋 月日、日田ヤブクグリ、飛騨産業、BONUS TRACK

協賛：小田急電鉄（株）、京王電鉄（株）、（株）世田谷サービス公社、東急（株）

助成：JSPS科研費23H03899 C03、20H01403助成、（公財）東京都都市づくり公社

後援：世田谷区、世田谷区教育委員会

生活工房アニュアルレポート2023

発行日：2024年5月27日

編集	桜井 祐、篠原 繭（TISSUE Inc.）、生活工房
デザイン	北岡誠吾
写真	富澤大輔（表紙+フライヤーギャラリー）
印刷	株式会社山田写真製版所
協賛	株式会社東急コミュニティー
助成	公益財団法人全国税理士共栄会文化財団
発行	公益財団法人せたがや文化財団　生活工房

〒154-0004東京都世田谷区太子堂4-1-1キャロットタワー
電話：03-5432-1543　ファックス：03-5432-1559
メール：info@setagaya-ldc.net
https://www.setagaya-ldc.net

本書の無断転写、複製、転載を禁じます。
©Setagaya Arts Foundation Lifestyle Design Center 2023-2024
Printed in Japan

生活工房アニュアルレポートとは――
生活工房の1年間の活動をまとめた記録・報告書です。

数字で見る生活工房（2023.4.1–2024.3.31）

来場者数

来場者総数

152,692

展覧会	116,762人
展覧会関連イベント	5,834人
ワークショップ	906人
セミナー・イベント	532人
地域と市民活動	13,136人
貸館使用者・来場者	15,522人

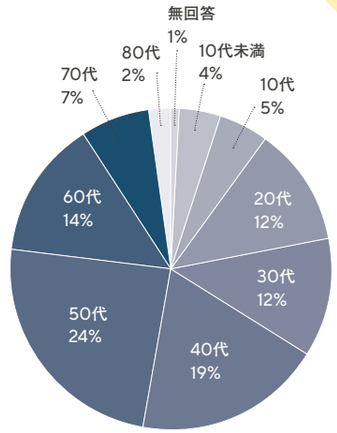
事業数

事業総数

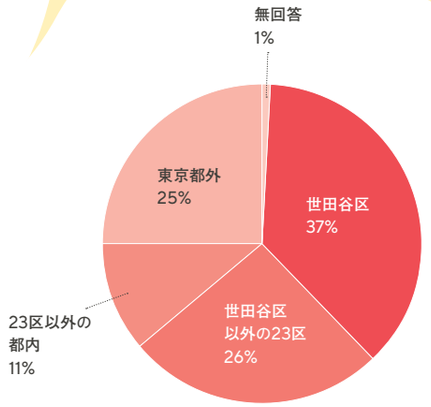
85

展覧会	6件
展覧会関連イベント	53件
ワークショップ	8件
セミナー・イベント	5件
地域と市民活動	13件

来場者の年代



来場者の住まい



2023年度来場者アンケート
（2023年4月1日–2024年3月31日）
1232件のデータより

世田谷文化生活情報センター
生活工房
Lifestyle Design Center

〒154-0004
東京都世田谷区太子堂 4-1-1 キャロットタワー
tel. 03-5432-1543
https://www.setagaya-ldc.net

三軒茶屋・三角地帯

△のはなし

生活工房 △のはなし編集部｜編

生活工房

三軒茶屋・三角地帯

△のはなし

生活工房 △のはなし編集部｜編

生活工房

目には見えない「△」の奥行き

地図にそのかたちはあれど、足を踏み入れれば路地が入り組み、どこがどうなっているかも不明瞭な「三角地帯」。そう呼ばれ出したのは最近という人もいるし、昔からそう呼ばれているという人もいる。三角地帯の領域も、どこが終点なのかも、人によって色々な捉え方があるようです。何とも味のあるこの場所のかたちは、○でも□でもなくて「△」。輪郭線も曖昧な「△」に踏み込んでみれば、この地で営まれる人々の暮らしと長い時間の積み重ねがありました。そんな時間の一部を、当事者の皆さんにお聞きしてまとめたのが、この本。「△」に長年の縁のある方をはじめ、うかがったお店で出会ったお客様や、近隣に住む若い世代の方の談もまじえた「おはなし」です。

※本書は「生活工房アニュアルレポート2023」の付録として、三角地帯で店を構える方々や、お客として三角地帯にいらしている方々の話をまとめたものです。本文中［A - 1］等とあるところは、「△の地図」と連動しています。

主にお話を聞いた人

岡野武さん
ハンコ専門店 長栄堂［C - 9］
三軒茶屋2 - 13 - 13

足立春夫さん、晃巳さん
mamesaya（乾物のあだち）
世田谷区世田谷2 - 22 - 2 サークルビル世田谷

金谷匡高さん
世田谷区教育委員会生涯学習課文化財係 学芸員

高野信雄さん、廣子さん
タカノ洋装店［D - 10］
三軒茶屋2 - 13 - 16

松井篤子さん
きゃら［E - 9］
三軒茶屋2 - 13 - 19 2F

秋元雅也さん
まさ［E - 8］
三軒茶屋2 - 13 - 9

目次

三角地帯のはじまり 05
エコー仲見世 12
ゆうらく通り 20
3番街 26
幻の銭湯と映画館、そして三元ビル 31

Chapter. 1

三角地帯のはじまり

三軒茶屋の「三角地帯」。手はじめにこのエリアで代々商売をしてきた店主に話をうかがうと、戦後から今に至るこの地帯のおおらかな営みが見えてきた。さらに、ここで聞いた話をもとに世田谷の郷土史研究者にお聞きしたところ、思わぬ発見も。そこに生きた人々の証言と、今から二、三百年遡る江戸時代の歴史から、「三角」のはじまりをたどってみよう。

戦後に祖父がはじめたのは屋根のないはんこ屋

元々は、母方の祖父が浅草で木版屋をやっていてね。浮世絵って、あれは絵師や摺師との協業だったんだ。板屋なんてのもいた。桜の木を反らないように、板を削って板木を作る。浅草はまだ、そういう職人が集まってたんだよ。うちの祖父の代まで彫ってたねぇ。

だけど、はんこを彫るようになった。はんこがすごく売れるようになったからね。戦争が始まると、配給をもらうときとか、何かとはんこが必要になったから。

空襲の時もね、はんこを彫る道具を持って逃げて。刃物とか砥石とか。空襲がおさまったら、外で商売してたそうで。はんこ屋の屋台だよ（笑）。そして、東京大空襲が来る。浅草一帯は焼け野原になってしまった。そこで祖父はなんとか三軒茶屋に移ってきたわけだ。この場所は、実はそうやって下町から焼け出された人が多いよ。

祖父が最初に三茶で店を開いた頃には屋根はなかったんだよ。だから、雨の日は休みだって（笑）。昭和25年（1950）に、アーケードが、エコー仲見世［C-9］ができたんだね。

そんなこんなで、このはんこ屋は僕で三代目。父が母の家業を継いだ、っていうのが珍しいかな？　父はもともと、警察官だったんだよ。戦前は警察官はみんな言うこと聞くからって威張り散らしてたみたいだけど。サーベルとか持ってね。

戦後の街は荒れてたからねぇ。反乱みたいなものもあったり。ヤクザの力も強かったからね。もはやヤクザが警察みたいな役割を担ってた。警察権力は強くなかったね。それで、危ないから辞めちゃおう、ってなって。それではんこ屋を継いだんだな。

（ハンコ専門店 長栄堂　岡野武）

終戦後に上京して作り上げた乾物屋

足立商店［E-9］はうちの親父が立ち上げたんだけど、親父は元々は兵庫県で学校の教師をしてたんだよ。だけど北京に小学校があるってもんで、母親と一緒に赴任したんだ。終戦間際だったんだけどね。戦争が終わって、引き揚げるのにも苦労したって言っていた。

それで、昭和20年（1945）に帰ってきて、田舎へ戻ると、「畑をやったらどうか」「田んぼはどうか」って、いっぱい言われたらしいね。だけど親父は「いや、俺は東京行く」と。

それで、三軒茶屋でお店を構えるわけ。帰ってきた二年後ぐらいの話かな。

ここ十年ぐらいは、店の移り変わりが激しいね。飲食店なんか、みんな新しい店になっちゃった。そもそも昭和30年代から、最初はエコー仲見世に、そして三角地帯と呼ばれる一帯に再開発の話はあったんだけどね。建物が密集しているから、消防署から「火災が起きたら大変だから、防火壁などで対策をしてください」って言われたことから始まった。それでも、開発はあんまり進まなかったんだけどね。大きく変わったタイミングは、平成8年（1996）にキャロットタワー［B-5］ができた時かな。タワーの中に入る人、お金をもらって他のところで商売をする人、引退して隠居する人がいたりね。

エコー仲見世や三角地帯にも、デベロッパーがなんとかしようとした形跡はあるんですよ。だけど、この辺りは地権者がたくさんいるから権利関係が複雑で、クリアしていこうとすると、なかなか開発しづらくなるわけ。最近になると、大家さん……って言っても、元々そこで商売をしてた人なんだけど、大家さんも歳だから、自分では商売できない。店を継ぐ人もいないからって、引退しちゃうわけね。それで貸店舗、ということになる。

（足立商店　足立春夫）

江戸時代の「大山参り」が三角地帯のはじまり？

現在の三軒茶屋周辺は江戸時代、畑が広がる農村地域というようなところでした。

この地域が大きく動くのは、江戸中期です。庶民の間で、神奈川県は伊勢原市にそびえる霊山・大山まで参拝する「大山参り」が爆発的に流行しました。それに伴い、関東のさまざまな場所で道が整備されました。

その一つとして、矢倉沢往還と呼ばれる古道が、大山道とも呼ばれるように。三軒茶屋の交差点から三角地帯の北側を走る、世田谷通りへ続く道です。それでも江戸の街中からの参拝客が絶えないため、大山道をショートカットする大きな道をもう一つ作ります。その新しい大山道こそが、三角地帯の南側を走る国道246号線です。この時点ですでに三角地帯があったと言えるのかもしれません。

三角地帯のビックエコー前にある石像［C-11］、あれこそが、活発に大山参りをしていた名残の道標。正面には「大山道」、右側に「二子道」、左側が「登戸道」と書かれています。

（世田谷区教育委員会 金谷匡高）

明治から大正にかたちづくられた「三軒茶屋」

そうして、三叉路に建てられた三軒の茶屋が「三軒茶屋」の由縁とも言われ、三角地帯のはじまりになりました。なお三軒茶屋といいますが、「三軒茶屋」という住所は元々正式なものではありませんでした。昭和7年（1932）に世田谷区ができた時に、元々あった駒沢町から独立する形で「三軒茶屋町」となったんです。周辺にお店がだんだんできて商店街が形成されていくのは、明治後半。陸軍の練兵場が近くにできたから、ということは言われています（現在の世田谷公園）。

その時代に作られたのが「玉川電車」。三茶には今は田園都市線と世田谷線がありますが、ここではかつて玉川電車が直通運転していました。渋谷から玉川（今の二子玉川駅）まで開業したのが明治40年（1907）。同時に「三軒茶屋駅」ができました。

明治末から大正にかけての当初は一般庶民はあまり利用せず、軍の関係者が渋谷からここに通っていたそうです。それから次第にこの周辺にも軍関係者が多く住むようになります。三茶が本格的に宅地化していくのは、関東大震災のちょっと前。大正10年（1921）ごろ、太子堂村の何もなかったところに、当時の東京府が府営住宅を作ります。その頃からこの辺一体の開発が始まり、新規居住者の流入が始まりました。関東大震災をきっかけに、過密な都心部を避けて郊外に家を移すようになり、三茶周辺の宅地化は加速します。

その後、昭和に入り戦中の建物疎開、空襲を経て、戦後をむかえます。ターミナルとして栄えた三軒茶屋も焦土と化し、日本軍が持っていた車などが米軍に供出されてしまいます。それで、戦後の移動手段や荷物の運搬手段として一時期、牛が復活したと聞きます。

というのも実は、この辺はもともと騎馬連隊もあり、動物も多かったんです。戦前の地図を見ると、大山道沿いの太子堂や駒沢の市場に「牛馬つなぎ場」と書かれています。その頃の三軒茶屋周辺には牧場も多くありました。牧場は、幕末から明治時代に欧米から入ってきて、都心部で盛んな産業となったもの。しかしその後、いつなくなってしまったのかは、はっきりしていません。

（金谷匡高）

Chapter. 2

エコー仲見世

国道246号線と世田谷通りをつなぐ、三角地帯の先端に位置する小さなアーケード街「エコー仲見世」。戦後から店を構える老舗もちらほらと残る、歴史ある商店街だ。中を歩いていくと、意外と奥行きがあることがわかる。この場所で、それぞれの店子家族が軒を並べて家族のように暮らしていたという。戦後、焼け野原になった三軒茶屋で一から商売を立ち上げたという人々の当時の生活模様とは。

世田谷といえば、仲見世？

仲見世がアーケードになったのは、浅草の新仲見世よりも早いって聞いたけどね。うちのタカノ洋装店がここで商売を始めたのが昭和20年（1945）頃で、エコー仲見世が建物になって商業組合ができたのが、25年（1950）。その頃からアーケードだったからね。

その前は、「百軒商店街」だったね。商店街といっても、体育館みたいな広い空間でパーテーションを仕切って商売してたんじゃないかな。実際に見てないから、想像だけど。

三角地帯で商売を始めた人は、本当、いろんなところからやってきてるよね。うちもそうで、この店の初代、ぼくの父は台湾人だったんだよ。東京に来ているうちに、戦争が始まって、帰れなくなってしまって。仕方がないからここで商売を始めたんだよ。

当初は、すずらん通りでパチンコ屋をやってた。70坪もあったね。だけど、仲見世で店をやるのがすごく魅力的だった。「世田谷といえば仲見世！」って感じだったからさ。こんなに狭い店なんだけど、すずらん通りの方は売っちゃって、仲見世に移ってきた、と。

（タカノ洋装店　高野信雄）

「おおらか」だった仲見世暮らし

うちは六人家族だったけど、全員、店の二階の六畳の部屋で寝てた。自分が高二の頃、昭和40年（1965）くらいまでかな。「住んじゃいけない」とお達しがでてから久しいけど、今でも上の部屋はあるよ。リフォームして、下のこの店よりも綺麗になっちゃった（笑）。

その頃はみんな店の二階に住んでたんだよ。仲見世のある家族なんかは、息子が結婚する時「家もないところに嫁にやれない！」って向こうの家族に言われたもんだから、別の地域に家を買った、なんて話もあったな。

ここは今よりももうちょっと道が広くて、倍ぐらいあったからさ。ベーゴマできるぐらいはあったよ。あとはキャッチボールしたり、相撲したり、喧嘩したり……、子どもの喧嘩がいつの間にか、親同士の喧嘩になるんだよね（笑）。この店の向かいに、青木屋［D-10］っていうおもちゃ屋さんがあったんだけど。そこに行くのも楽しみだったなぁ。

それでね、さっきぼくが「ここに高二の頃まで住んでた」って言ったじゃない。出たときに何があったかというと、放火なんだよ！　しかも、自分が修学旅行に行ってる時だよ。

帰ってきたら、焼けてるの。今ビックエコー［C-10］があるところ、あそこが協和銀行だったんだけど。銀行の屋上から水を必死で撒いて、全焼は免れたんだけど。

まぁあの当時は、みんな鍵もかけてなかったからね。おおらかだったんだよ。喧嘩も日常茶飯事。店の上で寝てる時も、誰かが酔っ払って仲見世で喧嘩してるの。ヤクザも多かったね。通りかかってはヒョイって、黙って物持っていくの。親父は屈しなかったけどね。「おい、お金に困ってるんだったら言えよ！　原価で持ってっていいから」ってさ。

（高野信雄）

なんでも揃う「便利な街」は、「飲み屋街」へ

スーパーができて仲見世も変わってきた。大規模小売店舗法で小売店は守られてきたんだけど、平成12年（2000）に廃止されちゃって。時代の流れかな。日常品ならなんでも揃う、まさに「街」だったんだけど。今は飲食店じゃないとテナントが入らないからね。

三角地帯って今は駒の湯のあたりまでそう呼ばれてるの？　こんなに広いんだ。自分た

ちの感覚では、（エコー仲見世の西側の路地あたりを指し）この辺だと思うんだけど。昔、ニッポン放送だかで、「三茶のパンティライン」だって紹介されて、大笑いしたことがあるな。ちょっとアングラな雰囲気もあったしね（笑）。

（岡野武）

アフターファイブは草野球

昔は仲見世のみんなで組んだ、野球チームがあったんだよ。あの頃の職場は、安い給料でたくさんの人を雇ったりできたからね。たくさんの仲間がそこにいてさ。経理とか、やることをパパってやって、「今日は草野球行ってくるわ！」って、そういうことができたんだけど。今は一人当たりの仕事が増えているから、やりづらくなったよね。

パソコンができた時、効率が良くなって、時間が余る、とか言ってたけどさぁ。効率化して余った時間を営業に回したりして、逆に競争が増えたと思うんだよ。

（足立春夫）

みんなが大家族みたいに生きていた

昔はみんな、千代の湯［G-6］に入ったもんだ。三茶小路飲食店街［E-7］にあった「どんぐり山荘」の店主とかね。山登りが好きで、山男だった。ロッテファン同士、意気投合してね。いわゆるおかまバーのママのとりさんもよく風呂場で見かけたな。本当に、みんな家族みたいなものだった。みんな亡くなっちゃって、店はほとんど変わっちゃったけど。

今、モロッコ料理屋があるところ。あそこは金魚屋［D-10］だったんだよ。元々お茶屋さんだったんだけど、釣りが好きすぎて、金魚を売るようになったんだよな。

そうそう、仲見世の草野球もあったよね。うちの親父が監督やって、仲見世のみんなで野球やったりしてたね。それで、商店街同士が戦うんだ。チーム名？「ナカミセ」だよ（笑）。昔の南海みたいなユニフォームを着てやってたな。

（岡野武）

通行量が１０００倍くらいあった

私は実は、生まれは福岡なんです。昭和41年（１９６６）頃、就職でこの店に来たクチですね。で、ここから逃げられなくなったわけ（笑）。話をするのが好きだから、接客しながら話しているうちに、顧客がいっぱいできて。もう辞めたくても辞められない！

その頃は人通りも多くてね。ここは駅と駅の間だったから、駅の乗り換えの時にエコー仲見世を突っ切る人が多くて。今の、何百倍、千倍は人がいたのよ！　そうなると、店も自然と繁盛するでしょ。もうね、店頭にさ、何を置いても誰かが買ってくれたよ。

（タカノ洋装店 高野廣子）

お店の二階に住む祖父をたずねて

さっきもスーパーの話をしたけど、今このへんはすっかり飲食店が多くなったね。昔はここでなんでも売ってた。惣菜屋の他に洋服屋、化粧品屋とか、日用品を売ってたり。

おもちゃの青木屋さんが生きていれば、もっと面白い話聞けるんだけどな。あの人は商店街のことならなんでも知ってる生き字引で、人気者だった。子どもの時は、青木さんのところでプラモデル買ってもらったりしてね。この辺で育った人はみんな覚えてるんじゃないかな。

実はここ、昔は階段があった。店やってる人はみんな家族で上に住んでたけど、うちは祖父だけが住んでて、ちっちゃい頃は、遊びに行くような感じでここに来てたな。世田谷の「街」といえば三茶だったしね。

一番最初は、今のアパマンショップ［D-10］があるあたり、２４６沿いがうちの店だった。今より広かったけど、「はんこ屋さんだから、狭くてもいいよね？」「ああ、いいよいよ！」ってこんな狭い店になっちゃった。昔はなんでも、いい加減だったからねぇ（笑）。

（岡野武）

Chapter. 3

ゆうらく通り

三角地帯には、戦後の闇市を思わせる、細くディープな路地が二本延びている。ゆうらく通り［E-9］には全体的に渋い飲み屋が軒を連ね、キャロットタワーあたりの開けた雰囲気からは想像できないような世界が広がっている。この場所は、通りの名前のとおり「ゆうらく」が紡いできた歴史が詰まっていた。

ゆうらく、「遊び」の街

足立商店があったゆうらく通り。あんな狭いところに、パチンコ屋がひしめいて、スマートボールや釣り堀もあったんじゃないかな。まさに「遊楽」、遊びの街だったね。

昔の駅前あたりにはキャバレーなんかもあったりしてね。三茶だから、「チャバレー」なんて言ってたけど（笑）。そこで八代亜紀が歌ってたって。ここから芸能関係の人に引っ張られたんじゃないか、って思うんだけど。まぁ、そういう街だったね。

（足立春夫）

裏にもう一本あった路地

小学校に上がる前くらいまでは、ゆうらく通りにあった店の上に住んでたね。みんながここに住んでた時は、店の裏にもう一筋道［E-10］があったんだよね。汲み取り式便所の、

バキュームカーのホースを通すための道でさ。今もその名残はあるよ。みんな、店を増築したから道という道ではなくなってるけど、屋根と屋根の間に隙間が残っててさ。

公衆トイレ［F-7］ができてからは、そっちを使うようになったんだけど。みんなが同じトイレを使ってたわけだ。街が一つの大きな世帯みたいな感じだったねぇ。

（足立春夫）

みんな一緒に暮らすような、おおらかな町

夫は元々、オーディオメーカーの会社員だったんです。だけど、お義父さんが毎朝40分ぐらい電話をかけてきて、足立商店を継ぐように説得されたんですね。「そんな会社潰れるぞ！」って。後に本当に潰れるんですが（笑）。

昭和57年（1982）頃でしょうか、引っ越してきた時には、キャロットタワーのあたりは畑でしたね。病院が一軒あるぐらいで。

太子堂の目青不動のあたりから、オムツをはいた一歳ぐらいの子どもが棒を振り回して三角地帯の方まで歩いてきたこともありました（笑）。それぐらいおおらかな町だったんですよ。店の鍵も開けっぱなしにしても泥棒も入ってこないし。隣の人の声が聞こえてきても気にしない。まさに家族のような、のどかな感じでしたね。子どもも、みんなで面倒を見るというか。子どもの顔を見て、どこの家の子だって、みんなわかりましたからね。

今の三角地帯は、新しい飲み屋さんばかりになっちゃいましたね。昔は助け合いだったり、取り決めがあったけど、そういうものはなくなってしまって。今は個々が勝手にやっている、という感じですね。ちょっと寂しいことですが。

（足立商店　足立晃巳）

昭和、平成、令和。飲む店も移り変わる

この店はもう40年になりますが、当時周りにあったお店の多くは辞めたり変わったりされてますね。建物は古いままだから分かりづらいけど、ほとんどが新しいお店。

たとえば全盛さん［D-8］なんかは、今は息子さんの奥さんが居酒屋としてやってます

けど、ご両親がやってた頃はとっても人気のある鰻屋さんだったんですよ。この辺のお店じゃ、いちばん古いかもしれないですね。土用の丑の日になるとものすごく並んでいて、すぐ売り切れちゃうから、私は取り置きしてもらってました。

今この辺で飲みに行くなら「まさ」がいいですよ。もう20年以上やってますかね。店主がとっても良い人で、うちのマスターができないことを全部やってくれるような弟分。マスターは料理以外のことは本当に何もできない人で、お店の看板の電球を取り替えるのだってまささんにやってもらってるんだから。

（きゃら　松井篤子）

飲み仲間の集まりも、はや20年

きゃらのマスターは俺の兄貴分なんだ。うちの店をはじめたころからの付き合いだから、大体20年くらいになるのかなぁ。

今日は同級生のお母さんがお店に来てくれてるんだけど、昔すごく世話になった人なんだよ。小学生の頃、近所に住んでた父子家庭の俺に「いつでもご飯食べに来なさい」って言って気にかけてくれて、よく晩ご飯食べさせてもらってたんだ。そんなお母さんが今じゃお客さんとしてお店に来てくれて、料理を出せるってのは嬉しいよね。

（まさ　秋元雅也）

溜まり場は同級生の店

「まさ」の店主は、駒沢中の同級生！　だからみんなで毎週のようにここに溜まってるの。でもこの辺って、俺たちが学生の頃、40年くらい前とか、ものすごい怪しげな雰囲気でとても入っていけるような感じじゃなかったんだよね。何が危ないとか禁止されてたとかじゃないんだけど、すっげぇ怖いとこって感じてたよ。最近は若い人も来やすい場所になってるよね。俺はこの店にしか来ないから他の店をあんまり知らないんだけどね。

（まさ　客）

Chapter. 4

3番街

三角地帯のもう一本の路地、3番街［E-10］。同じくディープな通りではあるが、中には若者も入りやすいような、今風の店も増えている。新旧の三軒茶屋らしさが混じり合った雰囲気の中に、創業当初から変わってないであろう店構えの豆屋も。路地と路地に挟まれた三角地帯のど真ん中に入り込んでいこう。

昼からディープな、眠らぬスナック

ここは昼間にオープンしてだらだら飲んだり歌ったり、おしゃべりするような場所……いわゆる「昼スナック」としてママが始めた。昼の時間ってディープで、面白いですよ。それで、8年ぐらい前からもうひとりのスタッフと僕が夜にお店に立つようになって、昼でも夜でも遊べるようになったんだ。ここら辺じゃ早い時間から飲んでても、なんだかんだで知らない人と盛り上がって、それで結局朝になることはよくあることだよね。

僕自身はもともとこの辺でよく飲んでる客のひとりだったんだけど、ママに誘われて夜に立ちはじめて。働きはじめてから知ったけど、同じ3番街の鳥ひろ［D-8］の店主は僕と出身高校が一緒だったりして、ここにもたまに遊びに来てくれてます。世間は狭いなあって思うことがたくさんある場所だよね。

（某スナック スタッフ）

またここで会いましょう！

ここに来るのは2回目なんだけど、すでに三角地帯のホームって感じ（笑）。お店に立ってるマスターのゆる〜い安心感があって。お客さん同士の距離感もめっちゃ良いんですよね。

ある夜のメンバーは、翌日入籍する初婚カップルと秘密の関係の初デートカップル（と私たち若者2人組）。2組は50代の大人で、お姉さんたちが恋愛観とか人生論を熱く語ってくれて、それがすっごくパワフルだし幸せそうで、元気をもらった夜だったな……。

で、また飲もうねって約束はするんだけど、連絡先を交換するわけでもなく「またここで！」って一期一会を楽しむのが心地よくて、飲み歩く面白さだなあって気がします。

（某スナック 客・20代女性）

飲みはじめは、お茶目な焼き鳥屋さんから

この辺ではしごするなら、ちょっと早めの時間から開いてる「鳥ひろ」で飲みはじめるのがおすすめかな！　ただ、この間は15時ぐらいに〝営業中〟の札が出てたので入ろうとしたら、単純に変え忘れてたみたいで「〝準備中〟に裏返しておいて！」って言われちゃいましたけどね（笑）。だいたい、16時半か17時ぐらいに開くのかな。

とにかくご主人がお茶目で素敵なんですよ。おしゃべりが好きな人だから、ひとりでも気軽に寄れるのが良いんですよね。美味しい焼き鳥をつまみに早めの時間からさくっと飲めます。でも一つのカウンター席にぎゅっと詰めて座るから、なんだかんだその場にいるみんなで盛り上がってることが多い。混んでて入れないかな、と思っても声をかけてみたら、カウンターの中にまで席を作って入れてくれたこともありました（笑）。

（鳥ひろ 客・30代女性）

お気に入りのお豆屋さん

この辺に住んでるんですけど、お昼の三角地帯ってあんまり立ち寄らないなぁと思って、なんとなく仲見世の方から狭い路地に入ってみたんです。そしたらいかにも老舗な「豆商はたの」[D-9]があって、個人的にはちょっとした発見って感じでした。

ここで買える豆のおやつが本当に美味しくて、私は甘納豆を必ず買って帰ります。袋についてる手書きの商品名の付箋が良い味を出してるし、包み紙のデザインも可愛らしいから手土産に買ったりするんですけど、ちょっと通っぽくないですか？

お店のことがちょっと気になって店頭のお母さんにお話を聞いてみたんですけど、創業70年くらいで、神奈川の秦野市出身のお父さんがはじめられたんだとか。店名の由来もそこからきているみたいです。お母さんはかれこれ50年は立ち続けてるって聞きました。

3番街の突き当たりに〈世田谷線➡〉って手書きの看板[D-8]があるの知ってます？それ、お母さんいわく「うちの次男が書いたみたい」って。それもまた発見でした。

（近隣在住・20代女性）

Chapter. 5

幻の銭湯と映画館、そして三元ビル

三角地帯をしばらく歩いていると、蔦が巻きつき年季の入ったトタンの壁にぶつかる。よく見ると扉があり、銭湯の入口とある。飲み屋街の只中に、銭湯とは……。不思議に思いながら世田谷線方面へ足を進めると、今度は「三軒茶屋シネマ」の看板が。三茶に、映画館？　そんな生活文化の痕跡がたしかに残る二つの物件をあとにさまようと、路地の奥に大きなビルがひっそりと佇んでいる。都市伝説めいた噂も絶えない、三元ビル。最上階にあるカフェ・a-bridgeからは、隙間なく並んだ三角地帯の屋根を一望することができる。そこでは、少し外側から眺めた三角地帯の話をうかがった。

三角地帯のみんなの湯

大学生の時、サウナにもよく行ってたね。三元ビル［D-7］がまだ新しい頃、上の方にサウナがあったんだよ。

あ、千代の湯？　あそこはもうしばらくやってないね。やめちゃったかな。千代の湯は休みの日以外は毎日通ってたね。姉ちゃんが気に入ってくれて、回数券をおまけしてくれたり、ジュースをくれたりしたんだよ。

仕事中にさ、ふらっと抜けてさ。店番はカミさんに任せてね。「風呂行ってくるよ！」ってね。するとみんな、自然と同じ時間に来てるわけ。みーんな、座るところが決まってさ。その位置じゃないと落ち着いて話せないんだよね。脱衣所のロッカーもなんとなく決めてさ。それで、夏なんかパンツ一丁で来るやつとかいたよ（笑）。もうね、ほとんど家の風呂だよね。千代の湯は家の一部だったんだな。

（岡野武）

銭湯裏の細い路地にて

三角地帯、昼は、なかなか来ないですよね。夜の、それこそ夜がふけた頃、三角地帯に辿り着く頃には、記憶はなかったり……。

どうしても飲食店が派手で目立つけれど、ドン・キホーテがやってるお店の「ピカソ」［I-7］だったり、パッケージプラザ［H-5］とかチェーンのお店もよく使っています。やっぱり店を営まれる人も多く住んでいるから、梱包屋さんや実用品店の需要もあるもので。古い銭湯の裏あたりのエリアです。

あと、屋台のような花屋さんの「花吾屋」［F-4］さん。季節のお花を買いに行きますね。花や植物、関わり方をつかめばとても楽しいですよ。最近は家で、一度調理した豆苗を再生させたりしています。

（近隣在住の画家　横山雄）

地元初の、珍しい銭湯

戦後の資料を見ると、千代の湯と、栄通り商店街にある弘善湯は経営者が一緒であると書かれています。まず戦前、昭和11年（1936）に千代の湯が誕生します。その後、戦争を挟んで昭和20年代に弘善湯ができたとされています。

銭湯はこのように家族経営が多いんですよね。石川県や富山県、新潟県といった北陸地域から、出稼ぎのような形で東京へ来て銭湯を開く方が多かったそうです。そして、銭湯事業が軌道に乗れば親族を呼び寄せる、という話をよく聞きます。

しかし資料によると、千代の湯は三茶エリアに住んでいた方が最初に経営を始めたようです。これは東京では少し珍しい例かもしれません。

（金谷匡高）

映画館の密集地帯でもあった

三茶っていうのはなんてったって、「世田谷といえば三茶！」というような街だったからね。大学生の時にも行ってたな、ロマンポルノを見に。246沿いにも三軒茶屋映画劇場［F-8］があったけど、僕は中央劇場［H-4］派だったな。あそこはいろんな映画を三本立てでやってて、よかったねぇ。お客さんもあんまり入ってないから、夏場なんかは最後、クーラーを消されたりしたけどさ（笑）。三軒茶屋シネマ［F-4］は、今も看板が残ってるね。デジタル化する際に「設備にお金がかかるから」ってことで、やめちゃったけど。支配人はまだあそこを事務所にして、映画の仕事をしているはずだよ。

あ、そういえば世田谷通り沿いの大東京信用組合の地下が映画館だったんだよ。「三軒茶屋大映」［D-5］だったかなあ。よく子どもの頃連れてってもらってたな。にしても、ここに映画館があったことは、あまり誰も話さないよね。みんな覚えてないんだな。

こんな狭い三角地帯に、4つも映画館があったわけだから、面白いね。

（岡野武）

三元ビルの謎と人情

この辺りが変わったのは、ワンルームマンションができたのが大きいよ。バブルの時にね、世田谷の土地を売ってさ。それで郊外の方に家を建てる人が多かった。売価の半分で家が建つんだもん。売り時だわな。その跡に、マンションが建つわけ。それまではだいたい住んでる人がわかったものだけどさ。全然顔も知らない若い人が出入りするようになってね。それで、玄関の鍵を閉めるようになったり。すっかり雰囲気が変わっちゃったね。

三元ビルに出入りが多かったのだけど……昔はこの街はヤクザも多くいた。もちろん怖いけど、今思うと人間味があるというか。子どもに「ちゃんと勉強はしろよ」とか「親を悲しませるなよ」とか言ってきたりしてね（笑）。

キャロットタワーができてから、なぜかヤクザがいなくなって、その代わり、チンピラが増えた。この時はちょっとガラが悪くなったね。でも三元ビル、今もちょっと怖いよね、エレベーターに幽霊が出るなんて話もずっとある（笑）。

（足立春夫）

三元ビルのカフェにて①　三角地帯で飲まない理由

お酒を飲もうと思ったとき、三角地帯にダイレクトに行くことは少ないですね。お店の雰囲気やお客との関係性が前に立つ店ではなく、テレビを眺めたりして気ままに過ごせる、地域の素朴な居酒屋を選びがちかもしれません。お店とのコミュニケーションを考えたとき、普段は自分自身のキャラクターよりも作家としての立場を求められることが多いので、名刺を捨てて匿名の個人として過ごすことを求めるのかもしれないですね。

それは私に限ったことではなくて、どんな仕事も立場上「何者か」を演じなきゃいけないことって多いじゃないですか。最近お仕事をさせてもらった、きくちゆみこさんの本『だめをだいじょぶにしていく日々だよ』（twilight）にあった言葉が印象深かったのですが、役割のある自分と、なんでもない自分を行き来して、「自分は巨大化してないよな」って確かめる時間が必要だと思うんです。

（横山雄）

三元ビルのカフェにて②　酒の「先輩」の教え

三角地帯とは少し外れますが、私がよく通うカフェ「ニコラ」の店主が言うんです。「お店は舞台だ」って。店という空間には、自分だけではなくて、働いている人がいて、飲んでいる人がいて。その中に、自分も登場人物として入っていく。

そんな豊かな「対話」が日々行われている場所が、三角地帯だったりするんでしょうね。いつも飲んでる常連がいて、たまたますれ違うように来るお客さんがいて。立場の違う人同士、どう関わるか。あるいは、関わらないか。

大型の飲食店で気ままに過ごすのと異なる緊張感がそこにある気がします。私はそういう楽しみ方を、三軒茶屋で出会った先輩たちに教わったんでしょうね。うまくいかなくて出入禁止になったりした人も、その粗相を覚えてなくて、また来たりしてね。よく聞くのが、三角地帯で新しい店をオープンしたら、出禁になった人が大量に来る。「ここならまだ、知られてないぞ」と……。

（横山雄）

味のある街、三角地帯の面影

三角地帯の建物が残されている理由の一つに、土地の権利関係が複雑だということがあると聞きます。新宿のゴールデン街や思い出横丁と同様、土地と建物の所有権が複雑に絡み合い、開発したくてもできない。そもそも交渉する相手が誰かわからない場所だと。

しかし、建物が残っても、店が存続するには後継ぎの課題があります。江戸っ子気質なので、息子が継がなければ店をたたむ方も多いんですよ。それに今はインターネットが普及し、色々な方法で商売も行えるようになってきました。とはいえ生活空間としてのこの場所。醸成された歴史的価値はあれど、少しずつ変わっていくのは当然のことです。一方で、再開発計画には強引なやり方があるのも事実。だからこそ、土地所有者や、現在の店舗の方と周辺住民とで、この土地に対する考え方を共有していくことが大切だと思います。

再開発って、街の面影がすっかり変わるじゃないですか。そうすると、そこに住む人たちの記憶からさえも風景が薄れていって、なかったことになってしまうように思うのです。

（金谷匡高）

三軒茶屋・三角地帯
△のはなし

2024年5月27日　第1刷発行

著　者　生活工房 △のはなし編集部

取材・執筆　シャラポア野口、浅利木蘭

編　集　篠原繭（TISSUE Inc.）、osawabrita

企　画　桜井祐（TISSUE Inc.）

デザイン　北岡誠吾

発　行　公益財団法人せたがや文化財団　生活工房
〒154-0004東京都世田谷区太子堂4-1-1キャロットタワー
電話：03-5432-1543　ファックス：03-5432-1559
メール：info@setagaya-ldc.net　https://www.setagaya-ldc.net

印刷・製本　株式会社山田写真製版所

Printed in Japan

嘘みたいだけど、嘘でもない場所

母から、三宿に住んでた20代の頃の話をよく聞かされてたんです。「飼い犬を近所の肉屋さんまでおつかいに行かせてた」とか「三茶での飲み仲間は某有名アーティストだった」とか「友達が100人いた」とか、とにかくこの辺で過ごした青春時代の楽しそうな話をよくしてたんです。で、私も憧れて、三年前くらいに三茶に引っ越しました。

越してきた頃は大学をやめたタイミングで、全然友達がいなかったんです。バイト先では仕事で手一杯だしマッチングアプリは性に合わないし。でもこの辺で飲んでると初対面でもすぐ仲良くなれて、どんどん友達が増えて。近所の子が多いから、ある日は夜中の二時に「いま三角地帯のスナックにいるんだけど！」って電話が来て、15分後には合流（笑）。あっという間にご近所コミュニティができて、今は徒歩数分ごとに友達の家がある状態です（笑）。母親の話が充実しすぎて「盛ってるな？」って感じてたけど、ここに住みはじめて、あながち嘘でもなかったのかなって思うようになりましたね。

（近隣在住・20代女性）

世田谷文化生活情報センター

生活工房

Lifestyle Design Center

SANGENJAYA TRIANGLE AREA MAP

東急世田谷線 三軒茶屋駅

東急田園都市線 三軒茶屋駅

すずらん通り

世田谷通り

国道246号線

コルモビア

長崎

キャロットタワー
（生活工房 3〜5F）

エコー仲見世
昭和初期ごろからこの辺りにあったとされる露店やマーケットが戦後の闇市を経て、昭和25年、当時では珍しいアーケード型の商店街「エコー仲見世」に。日用品ならなんでも揃う街として機能した。現在はテナントとして入っている飲食店も多いが、はんこ店、洋装店、時計店、履物店など、古くから営業をしている日用品店も多く残る。[p. 6, 8, 12–19]

鳥ひろ
カウンターの目の前で、マスターが手際よく焼いてくれる焼き鳥はどれも絶品。狭い店内ながらも、客同士やマスターとの距離感が心地よい。[p. 27, 29]

ハンコ専門店 長栄堂
創業70年のはんこ店。3代目主人の岡野武さんは、はんこ職人の全国技能グランプリで1位を受賞したことがある。[p. 6–7, 15–19]

大山道の道標
三軒茶屋駅の世田谷通り口の脇にある石像。江戸時代に流行した大山詣りの案内のために建てられたもので、これまでに玉川電車の開通や東京オリンピックの道路拡張などにより転々と移されたが、1983年に元の位置に近いとされる現在の場所に設置された。[p. 9]

三元ビル
ゆうらく通りのつきあたりにある古い7階建てのビル。不動産サイトには1966年竣工とある。現在はバーやカフェ、サロン、ダンススタジオなどが入居しているが、過去にもさまざまな使われ方がされていたようだ。[p. 32, 36–38]

「世田谷線→」の看板
3番街のつき当たりの壁に取り付けられた手書きの看板は、どうやら「豆商はたの」の息子さんが中学時代に書いたものだそう。迷路のような三角地帯で迷ったときの目印として今日現在まで機能している。[p. 30]

タカノ洋装店
昭和20年ごろからここで洋装店を営んでいる。2代目店主の高野信雄さんは、高校2年までこの店の2階の6畳間で家族6人で暮らしていたのだそう。[p. 13–15, 18]

三軒茶屋大映
「三角地帯には3軒の映画館があった」と記憶している人が多いが、長くこの街にいる方が「実は4軒あった」と語っていた。1960年代には姿を消していたらしいこの映画館を知っている人は多くなさそう。[p. 35]

三茶小路飲食店街の看板
3番街やゆうらく通りのさらに奥に入ったところ、頭上にあらわれる多数の店名が羅列された看板。帰り道に見上げる看板の裏側には「又のご来店を心よりお待ち致して居ります」のメッセージが。[p. 17]

三角地帯の終点
三角地帯の始点といえば世田谷通りと国道246号がぶつかるビックエコーの角。しかし街の人に「三角地帯の終点はどこまで？」と聞くと、返ってくる返事はまばら。雑誌などでは、この通りの先にある駒の湯[p. 16]（三軒茶屋2丁目）のあたりまでと紹介されることが多い。

豆商はたの
70年以上三角地帯で営業している豆菓子店。お店の中央が3番街とエコー仲見世を行き来できる通路になっている。[p. 30]

青木屋
2009年に閉店した玩具店。店主の青木さんは街の人気者で生き字引的存在だったそう。現在でも商店街の多くの方から彼のお話を伺った。[p. 14, 19]

金魚屋
現在モロッコ料理店があるこの場所に、かつて金魚店があったそう。[p. 17]

3番街
WEBで「三角地帯」と画像検索すると、最もヒットするのがこの通り。新旧さまざまな飲食店が軒を連ね、路地の左右いっぱいに看板や赤提灯が並ぶ風景は現在の三角地帯の象徴と言えるだろう。[p. 26–30]

ゆうらく通りと3番街の間にあった細い通路
水洗トイレのない時代、汲み取りのために今はない細い通路があったのだという。その後、三元ビルのある通りの奥に公衆トイレができ（現在はもうない）、各店のトイレは廃止。それぞれが店を拡張し現在その通路はなくなったが、高いビルからお店の屋根部分を見ればその名残があるそうだ。[p. 21–22]

個性豊かなスナック
この周辺の迷路のような路地には数々のスナックが並ぶ。「水割りがめちゃくちゃ濃い店」「看板が味わい深い店」「あそこって今営業しているのかな？」……など、三角地帯の飲兵衛たちはそれぞれの"某スナック"について語る。

まさ
縄からちょっとしたおつまみまで豊富なメニューが揃う居酒屋。店内はにぎわっていることが多いが、外からは店の様子が見えないため、扉をちょっと開けて空席を確認。[p. 24–25]

三軒茶屋シネマ
2014年閉館。三角地帯にあった4軒の映画館の中でも最後まで営業していた。今でも肉のハナマサの旗には「三軒茶屋シネマ」の看板が残る。[p. 35]

花吾屋
かつての三軒茶屋中央劇場と三元茶屋シネマの間にあらわれる、屋台のような小さな花屋。「色とりどりの花が手頃に買える」「夜遅くまで開いている」と地元の人から愛されている。[p. 33]

千代の湯
三角地帯を歩きまわっていると大抵、「千代の湯」を囲う、高の巻きついたタンの壁にぶつかる。閉店から長らく経ったような外観だが2021年ごろまで営業しており、地元の人の憩いの場だったそうだ。現在は休業中。[p. 17, 32–34]

公衆トイレがあった？
過去には付近の飲食店が共有で使用していた公衆トイレがあったそう。現在、自動販売機が設置されている隅のあたりか？ [p. 22]

足立商店があったところ
昭和22年創業、安心・安全な食材のみを扱う老舗乾物店。三角地帯での72年に渡る営業を終え、現在は上町に移転し「カフェ mamésaya」をオープン。[p. 7–8, 21–23]

ゆうらく通り
1950年代の地図を見ると、この通りはパチンコ・パチンコ・ピリヤード・パチンコ……。名前の通り「遊楽」ばかりの一筋だったのだ。[p. 20–25]

三軒茶屋中央劇場
ブルーとピンク、男女のカッパの看板が目印で「カッパの映画館」と呼ばれ親しまれていたそう。2013年に閉館したあとも2年ほど建物や看板が残されていたが、現在はカラオケ店になっている。[p. 35]

パッケージプラザ
包装容器や店舗用品の専門店。付近のお店を支えている。[p. 33]

三軒茶屋映画劇場
周辺で最も早く、大正時代に開業した映画館。1992年の閉館後は14階建てのマンションになり現在に至る。[p. 35]

きゃら
座席はカウンター数席と小さな座敷のみ。メニューはなく、マスターがお腹の空き具合に合わせて料理を出してくれる。入り口に貼られた愛犬"茶ちゃ"の写真と「美味しいお刺身定食有ります」の文字が目印。[p. 23–24]

ドン・キホーテ ピカソ
三角地帯、南側の三角の頂点とされるスポット。[p. 33]

三軒茶屋・三角地帯
△の地図

本地図は「生活工房アニュアルレポート2023」の付録として、三角地帯の方々にうかがった話をもとに制作しています。
©は過去にあったと証言のあるもの、[p. 00] とあるところは別冊「△のはなし」の該当ページと連動しています。